

# ピンドロスにおける正義について

## I

桜内 理恵

周知のごとく、正義は、古代ギリシャ思想において重要な意味を持つ。叙情詩人、ピンドロスも又、「正義は真実の道である」(Parth. 84.4)<sup>1)</sup>と述べた断片を残している。彼にとっても正義が重視されるべきものであったということは、疑う余地がないであろう。では、ピンドロスにとっていかなることが正義に叶うことであり、そこにどのような意味があったのだろうか。この論文では、ピンドロスの正義の概念とその意義とを検討してみたい。<sup>2)</sup>

ピンドロスは、『イストミア祝勝歌第7』において、ペガソスに乗って天に昇ろうとしたペレロポンテースを非難し、次のように語っている。

私達は、皆同じように死ぬ。

運命は、様々なものではあるが。

しかしもし、人があまりに遠くのを望むならば、

神々の御座、青銅の床に至るには力及ばぬであろう。

というのも翼もつペガソスは、

彼の主人、ペレロポンテースを振り落としたのだ。

天上の館に行き、ゼウスの仲間に加わることを望んだ彼を。

正義に外れた幸せには、最も辛い最後が待ち受けている。(Isth. 7.42-48)

ここで、「正義に外れた」と言われているのは、明らかに天に昇ろうとしたペレロポンテースの行為である。天に昇るということは、神になろうとすることであり、すなわち人間の領分を越えた行為である。ピンドロスは、人間の領分を越えた行為を「正義に外れた」と述べているのである。そして、それ故にペレロポンテースは命を落とす羽目になった。このような正義に外れた行為には、辛い罰が下るのである。

ピンドロスは、これと同様の行為とそのために神から下された罰について数箇所述べている。『オリンピア祝勝歌第1』におけるタンタロスは、神々の目をくすね、ネクトルとアムブロシアーを盗み、飲み友達の仲間に与えたために罰を受けた<sup>3)</sup>。人間の友人を不死にしようとしたタンタロスの行為も、ペレロポンテースの天に昇ろうとした行為と同様、神の領分を冒そうとした行為であろう。そして彼は、「救いのない辛い日々を送る」ことになった。『ピュティア祝勝歌第3』において述べられているアスクレーピオスも又、死者を生き返らせたためゼウスによって殺された<sup>4)</sup>。これらの物語には「正義に外れた行為」という記述はない。しかし、これらも明らかに正義に外れた行為と考えられる。そして、神々は、人間の過ちをけっして許しはしない。アスクレーピオスの物語の後、ピンドロスは次のように忠告している。

私達は、足下のことを知り、

私達が、いかなるものであるかを知って、  
神々から人間の心にふさわしいものを求めなければならない。  
私の心よ。不死なるものの生活を求めてはいけない。  
そうではなく、可能な手段を用いよ。(Pyth. 3.59-62)

又、『ピュティア祝勝歌第4』に述べられているアルテミスに殺されたティテュオスの罪は、女神との結婚という人間の領分を越えたものを望んだことである。そして、ティテュオスの罰を語った後にも、ピンダロスは、「人は、出来る限りでの恋を求めるように」と忠告しているのである<sup>5)</sup>。

神々の生活を望むことは、正義に外れたことである。人間は、人間にふさわしい仕方  
で生きなければならない。そのふさわしいものを、神々が人間に与えるのである。この  
ことは、ピンダロスが繰り返し述べていることである。

むろん神々の領分を冒すと神の怒りを買うということは、ホメーロス以来の伝統的な  
考え方である。しかし、『ピュティア祝勝歌第3』においてアスクレーピオスの話と並  
べて語られているコロニス話では、彼女は、アポローンに愛されながら、他の者と  
結婚したために罰を受けている<sup>6)</sup>。コロニスは、不死なるものに近づこうとしたわけ  
ではない。彼女の罪は、神の愛を十分に受け入れなかったことにある。

人間が神になろうとすることは、神々の世界を冒すことであり、正義に外れたこと  
である。そして又、神に与えられたものをないがしろにすることも神を冒とくすること  
であり、正義に外れたことである。人間は、神々の意志のままに生きなければならない  
のである。ピンダロスは、非常に敬虔な詩人であった。神々は絶対的な存在であり、神々  
に不敬を働くような行為には必ず罰が下ると考えたのである。

これまで考察してきたピンダロスにおける正義は、人間と神々との関係の上に成り立  
つものであった。では、人間どうしの、人間社会における正義とは、どのようなもので  
あろうか。ピンダロスは、次のように述べている。

それぞれにそれぞれの習慣がある。そして、各々、自らの正義を語る。(fr.203)

この短い断片は、正義は、それぞれの社会の習慣に基づく様々なものがあるとい  
ことを示している。人間社会には、それぞれの習慣に基づく正義がある。ピンダロスに  
とって、正義の在り方は一様ではない。

より強い人間は、かつての正義を廃止する。(Nem. 9.15)

ピンダロスにとって、あらゆる掟がゼウスの意志に基づくものであるということは、  
多くの学者が認めるところである<sup>7)</sup>。「正義に叶った国が減びることはない」(Pyth. 8.  
22)。神は、正義に反した習慣に基づく国家を繁栄させることはしないであらう。それ  
ぞれに神の意志に叶った習慣なのである。人間と神々との間に幾つかの正義の在り方  
があるとは考えられない。神々と人間との間には、明らかな違いがあり<sup>8)</sup>、人間は神の意  
のままに生きるべきものである。それが神に対する正義であった。しかし、神々の下  
にある人間の世界には、幾つかの習慣があり、それに基づく各々の正義がある。

死すべきものどもと不死なるものどもの王なるノモスは、

至高の手によって最も非道なものを正義に叶ったものとなす。

私は、ヘーラクレースの所業からそう推測する。(fr. 152)

この断片におけるヘーラクレースは悪者である。これに続けて、彼がゲーリュオネースとディオメデースから牛や馬を盗んだことが述べられている。一般に邪悪な怪物にされているゲーリュオネースとディオメデースはここでは、ヘーラクレースの被害者になっている。「彼等は、ヒュプリスではなく武勇のために抵抗した」のである。ここで、最も非道なものをと語られているのは、彼等の物を盗んだヘーラクレースの行為である。ノモスは、このような行為をも正義に叶ったものにしてしまうのである。

このノモスが何を意味するものであるかについて、多くの学者たちが様々な議論を繰り返してきた。ここでは、これについて詳しく論じることは出来ないが、一般には正義に外れた行為とされている強奪も、あるノモスの下では正義に叶ったものとなるとピンドロスが考えていたことだけは、明らかである<sup>10</sup>。

ピンドロスは、人間社会には様々な正義の在り方があると考えていたのであるが、では具体的には何をすることが正義に叶ったことと考えているものであろうか。彼は、イクシオーンは二つの理由でゼウスに罰せられたと述べている。

二つの過ちが、彼に苦しみを引き起こしたので。

一つは、英雄が死すべき者どもの中で

計って親族の血を流した最初のものであるためである。

又ある時、秘密の寝室にゼウスの妻を誘ったためでもある。(Pyth. 2. 30-34)

イクシオーンがゼウスの妻を誘ったことは、先に見たティテュオスの罪と同じである。しかし、彼が人間の中で最初の親族殺しをした者であるという罪は、神と人間との関係ではなく、人間どうしの、人間社会の問題として考えることが出来るであろう。イクシオーンは、私利私欲のために妻の父を殺したのである。そして、ゼウスは、その理由でも彼を罰しているのである。

さらに、ピンドロスは、『ネメア祝勝歌第5』においてテラモーンとペーレウスについて物語っている。テラモーンとペーレウスは、異母兄弟のポーコスが競技に優れているのを妬み、彼を殺そうとした。そして、くじに当たったテラモーンがその役を引き受けて彼を殺した。そのために彼等は、アイギーナ島より追放された。そして、ピンドロスは、この行為を「正義に外れた行為」と言う<sup>11</sup>。ここで言われている正義に外れた行為は、イクシオーンの罪と同じ殺人である。そして、これらは、嫉妬や欲から行われた殺人である。又、ピンドロスは殺人には及ばなくとも嫉妬や欲による行為を、正義に外れた行為と述べている<sup>12</sup>。

そして彼は、他人のものを羨んだり望んだりすることのないようにと忠告している。

他人のものを求めることは、良きことではない。

己の祖先からのものを求めよ。(Nem. 3. 28-29)

人間が神々のものを求めるのと同様に、人間社会にあって自分分を越えたものを求めることは、正義に外れた行為なのである。

ピンダロスにおける正義について

そして、正義に叶った心は、ヒュプリスを憎む (*Pyth.* 4. 280-284)。正義は、外国人を保護するものである (*Nem.* 4. 12, *Ol.* 2. 5-7)。又、たとえ敵であっても善い行いをしたものは認めることが正義に叶ったことである (*Pyth.* 9. 96)。国の指導者は、正義に叶っていないなければならない (*Pyth.* 1. 85-87, *Nem.* 10. 53-54)。ディカーの女神は、ヘーシオドス同様テミスの娘であり、エウノミアとエイレーネーの姉妹である (*Ol.* 13. 7)。そのディカーの女神は、町を揺ぎないものとし、ヒュプリスを寄せ付けない (*Ol.* 13. 3-10. *Pyth.* 8. 1)。

ディカーをヒュプリスと対応させること、外国人の権利を守ること、これらは、ホメーロスから言われていることである<sup>13)</sup>。又、私利私欲を正義に外れたことと述べ、正義に叶った指導者を求めること、私達は、このような正義の記述にヘーシオドス以来の伝統を感じることが出来る<sup>14)</sup>。

しかし、ヘーシオドスにおいては、『神統記』で述べられているゼウスの意志による宇宙の秩序が『仕事と日』においてそのまま人間社会にも適用されている。自然の法則として現れる正義は、人間の正しい営みの在り方を基礎付けていく。ヘーシオドスの語る人間社会の正義には、人間社会にのみ存在するような様々な正義を見出すことは出来ない<sup>15)</sup>。この点に、正義を通して見た神々と人間の世界についてのピンダロスとヘーシオドスの違いがあると思われる。

人間は、各々のノモスの中で、各々の領分を越えずに生きるべきなのである。けっして、ヒュプリスに陥らないこと、神々に対しては、人間の領分をわきまえること、そして、人間社会の間にあっても各々の分をわきまえること、これが、ピンダロスの語る正義である。

正義に反した行いをすれば、必ず罰を受ける。では、正義を全うした人間は、何を受けるのであろうか。ピンダロスは、『ピュティア祝勝歌第3』において、コロニスとアスクレーピオスの物語の後にカドモスとペーレウスについて次のように語っている。

しかし、確実な生涯は、アイアコスの息子、ペーレウスの下にも神にも似たカドモスの下にも生じなかった。

彼等は、人間の内でも最高の幸せを持っていたと言われていたが。 (*Pyth.* 3. 86-89)

そして、ピンダロスは、最高に幸福な時期の彼等について語った後、彼等の娘や息子が引き起こした彼等の稀に見る不幸について述べている。そして言う。

その時々で違う風が吹く。

人間の幸福は、栄えて長く続くものではない。 (*Pyth.* 3. 105-106)

カドモスもペーレウスも神々に愛された。そして、彼等が何か不正なことをしたという記述はない<sup>16)</sup>。しかし、ピンダロスは、ここで彼等にも不幸な時期があったことを強調しているのである。人間とは、幸せな状態に長く留まっていられるものではない。人間とは、はかなき者であり、神々に愛されている時のみ幸福になれる<sup>17)</sup>。

ヘーシオドスは、「正しい人々は栄え、不正な者どもは罰を受けると考えた。」<sup>18)</sup>又、ヘーシオドスの正義観を最もよく受け継いだと言われるアイスキュロスも、「正義を守る家は、常にりっぱな子孫を授かる運命にめぐまれる」<sup>19)</sup>と述べている。

しかし、ピンダロスは、正しいものも不幸に陥ることを嘆いたアルキロコスやテオグニスと同様に<sup>20)</sup>、人間というものは善い行いをしても必ずしも神々に愛され、幸せでいられるものではないと考えたのである。

しかし、人間は、正義を貫いたとしても、何も得るものがないのであろうか。ピンダロスは、『オリンピア祝勝歌第2』において人間のはかなさ、運命の不確かさを述べた後、正義に叶った人と正義に反した人について語っている。ここでは、人間は、死後、裁判を受け、この世とあの世で正義に反したことのない人間は、永遠の幸福を受けられる。それは、幸福の島においてである。そして、そこにペーレウスとカドモスもいると述べている<sup>21)</sup>。

幸福の島の考え方は、ホメーロスのエーリュシオンの野にもあるように伝統的な考え方である。ヘーシオドスは、正義に叶った善き英雄たちの住みかとして幸福の島を語っている<sup>22)</sup>。ピンダロスも又、不正に身を汚すこともなかった人間の最終的な場所に幸福の島を考えたのである。

ピンダロスにとって、時は神的な役割を担っている<sup>23)</sup>。その「クロノスすら正義に叶ったものであろうと、正義に外れたものであろうと、成就してしまった行為の結果を取り消すことは出来ない」(OL.2.15-17)のである。しかし、「時は、正義に叶った人間どもの最高の守護者である。」(fr. 145)

人間というものは、正義に叶った生活をしていても、常に栄えて幸せでいられるものではない。しかし、この世では必ずしも幸福に生きられなかったとしても、正義を全うした人間は、死後には永遠の幸福を手に入れることができる。ピンダロスは、このように考えたのである。そして、時は、常にそれを見守っているのである。

## II

では人間は、正義に叶っているのかいないのか、どのようにして判断することが出来るのだろうか。ピンダロスは、これを判断するのはヌースであると明確に述べている。

地上の人間の種族のものが、正義によってより高い塔へ登るのか、

あるいは、曲がった策略によってより高い塔へ登るのか。

私には、ヌースが区別し真実を語るのである。(fr. 201)

考察してきたように、ピンダロスの語る正義は、各々の分を越えないことであった。そして、それは考えられるものである。

すべてのものに尺度がある。

そして最も適切なことを考えるのが、最良のことである。(OL.13.48-49)

このように、正義はヌースが判断するものである。そしてすべての尺度は考えられるものであるとし、ヌースの動詞形を用いて述べられる。

後に、知恵、理性としてギリシヤ哲学に重要な意味を持つヌースは、ホメーロスにおいては、目に見えるよりも深い真実を知ることの出来る直感的な洞察力を意味するものであった<sup>24)</sup>。ヌースは、確かに知的な作用であるが、しかし、善悪の判断をするような力は持っていない。又、ホメーロスは、「ゼウスのヌース」について多く語っている。これは「ゼウスの意志」であり、「ゼウスの意向」である<sup>25)</sup>。又、ヌースは、人間の様々な性格を表現するものでもあった<sup>26)</sup>。

同様に、ヘーシオドスも「ゼウスのヌース」を多く語っている<sup>27)</sup>。そして、人間のヌースには、不正なものがあり無知なものがある<sup>28)</sup>。ヘーシオドスは、考えることにホメーロスにおけるよりも重要な働きを与えたとして指摘されている<sup>29)</sup>。しかし、人間の「ヌースが正義に叶ったものとそうでないものを区別する」というような記述は、ホメーロスにもヘーシオドスにも又、ピンダロスの同時代人であるアイスキュロスにも見られるものではない。彼等にとって、ゼウスのヌースが最良のものであったとしても、人間のヌースはあくまでも愚かな弱いものである<sup>30)</sup>。

ピンダロスの他にヌースと正義の関係を語っているのは、ピンダロスと同様にゼウスの思いのままに人間の運命が榮枯するこの世を大いに嘆いたテオグニスである。彼も又、

常に真っすぐな判断が胸の内に宿る人、

彼のヌースは、正義のことを思慮する。

しかし、悪き人々のヌースは、

良き運命も悪き運命も右往左往するのであるが。(395-397)

と立派な人間のヌースは、正義を判断することが出来る<sup>31)</sup>と述べている。彼にとっても正義は、考えられるものである。

しかし不正な父から生まれた子供は、

正義のことを考えながら事をなす。(737)<sup>31)</sup>

では、彼等にとってヌースとはいったいどのようなものであったのだろうか。ピンダロスも又、ホメーロスやヘーシオドスにも言われている「ゼウスのヌース」(Pyth. 5. 122)や他の神々のヌースについて語っている。ケイローンのヌースは優しく(Pyth. 3. 5)、アポロンのヌースは全てのことを知ることが出来る(Pyth. 3. 29)<sup>32)</sup>。

又、「雄々しいヌース」(Ol. 9. 75)「遅しいヌース」(Pyth. 5. 44)<sup>33)</sup>等、人間の性格を表していると考えられるものもある。そして、ピンダロスは、このようなヌースでもって人間が行動することを賛美しているのである。さらにヌースは、正義に外れたことを意味する不正や傲慢さと対比させて述べられている。

彼は、ヌースによって富を導いた。

不正や傲慢な若さを楽しむことなく。

むしろピーエリデスの聖地で詩作を楽しみながら。(Pyth. 6. 46-47)

ここで述べられているヌースは、善い又は悪いという形容詞が付かなくとも、不正や傲慢さなどに対する正しさの意味を担っていることが認められる。ヌースそのものが正

義に近い意味を持っているのである。そして又、「真っすぐなヌースさえも試金石によって試される」(Pyth. 10.68)ことも述べられている。

ピンドロスが、ヌースをいかなるものと考えていたか『メネア祝勝歌第5』においてよく理解することが出来るであろう。ここでは、神々と人間の決定的な違いが語られ、それに続けてヌースについて次のように述べられている。

人間の種族は一つであり、神々の種族も一つである。

共に一人の母から生まれた。

しかし、全く異なった力が、私達を分け隔てている。

一方のものには何もなく、

他方のものには、青銅の揺ぎない座なる天上が永続している。

しかしそれでもなお、私達は、偉大なヌース、

あるいは本性において不死なる神々に似ているのである。

にもかかわらず、私達は、昼にも夜の見張りの中でも、

運命が、私達を

いかなる方向に向かわせようとしているのか分からないのであるが。(Nem.6.1-7)

ピンドロスにとって神々は絶対的なものであった。人間は、神々のものを求めてはならないし、神々より受け取ったものをないがしろにしてもならなかった。神々の世界は、人間の世界とは全く別のものである。ここで、ピンドロスは、神々と人間の違いを強調した上で、それでもなお、人間は、ヌースにおいて又は本性において神に似た存在であると述べているのである。そして、そのヌースは、正義を判断することが出来るのである。それでも、人間の運命は人間の知るところではないのであるが。

ではテオグニス、ヌースをどのように考えていたのであろうか。彼は、「愚かな人間のヌースとテューモスはうわついている。しかし、思慮は、良きヌースを善へと導く。」(1053-1054)と述べている。しかしながら、「わずかなものだけが真のヌースを持っている」(74,698)のである。そのような人間のヌースは、貧乏の中でも正義を思慮することが出来る。けれどもテオグニスは「人間は皆、金持ちを尊敬し、貧乏人を軽蔑する。皆人間のヌースとは同じようなもの」(622)であると悲観し、「貧しさは人間のヌースを向こうみずなものにしてしまう。」(196)、「悪い友人は、友のヌースを悪に染めてしまう。」(36,1271)、そして「人間のヌースは不正に説き伏せられる」(379)ものである等と嘆いている。又人間は、「一つの舌に二つのヌースを持つこともある。」(91)テオグニスの語る人間のヌースは、非常に悪に染まりやすいものである<sup>34)</sup>。そして、テオグニスは良いヌースを持ってと繰り返す述べるのである<sup>35)</sup>。さらにテオグニスは、ゼウスのヌースを人間の弱いヌースと対応させている。

ゼウスのヌースは人間に勝っており、

人間のヌースは私利私欲にまどわされるものである。(202-293)

ここに述べられている人間のヌースと神々のヌースは、全く異なるものである。ここにはピンダロスの語るような神に似た人間のヌースを見ることは出来ない。

テオグニス<sup>1</sup>は、人間のヌースが正義を判断出来るものではあるが、それは非常に害されやすいものであること認めているのである。神々は人間に災いや利益の原因となるものを送る。(133)そして、愚かなヌースのために不正に陥ったものをゼウスは罰するのである<sup>36</sup>)。

勿論、ピンダロスも全てのヌースが完全であると言っているのではない。ピンダロスがその人間の能力は全てその生まれにあると考えていたことは、よく知られている。ヌースも同様である。生まれ持った資質の良くない人間は、無力なヌースによって数えきれない武勇を試みるのである<sup>37</sup>)。又、クロイソスの神々に対する気前よさにアクラガースの僭主、フェラリスの「無情なヌース」を対比させている<sup>38</sup>)。彼のヌースも無力なものなのであろう。しかし、ピンダロスは、良いヌースが悪に染まったり、私利私欲に判断を狂わすということを考えなかった。むしろヌースそのものに、正義に近い意味を持たせてすらいるのである。

ピンダロスもテオグニスも共にこの世の無情を嘆いた。そして、彼等は、共にヌースに正義を判断する力を見出し出した。彼等は、ヌースにホメロスやヘシオドスよりもより知的な作用を与えたのである。しかし、テオグニスが、神々のヌースに対して、判断を誤りがちな、悪に染まりがちな人間のヌースの弱さに注目し、それを嘆き、良きヌースを持つようにと強調したのに対し、ピンダロスは、人間のヌースは神に似たものと述べ、人間が本来持っているヌースの素晴らしさを強調したのである。即ち、テオグニスは、人間が正義を判断することの困難さを説いたのに対し、ピンダロスは、人間が自ら正義を判断出来るということを讃えたのである。

ピンダロスの言う生まれつきの資質とは貴族に流れる血である。ピンダロスが善い資質を持っていると考えた人々の内には、カドモスやペーレウスも入るであろう。彼等は、自らのヌースによって正義を判断し、それを全うすることが出来るはずである。しかし、彼等も不幸に見舞われる。ピンダロスにとっては、人間の世は、不正を行えば必ず罰せられるものであっても、良いヌースをもち正義に叶った生活を送るものが常に幸せな出来事に会おうものではなかった。

しかし、それでもなお人間は、神的なヌースを持って自ら正義を判断することが可能なのであり、又ヌースを持つが故に、人間は人間社会のそれぞれに応じた正義を判断することが可能なのである。人間とは、正義を判断することが出来るヌースを持っているという点で素晴らしい存在である。私達は、ここに人間の世のはかなさを訴えがながらも、人間のヌースに人間の誇りを見出し出したピンダロスを知ることが出来るのである。

さらに付け加えるならば、人間とは、そのようなヌースを持ってしても必ずしも幸福で在り続けられるものではない。ピンダロスがそのような人間に見出した最終的な場所が、伝統的な幸福の島だったのであろうか。



## 注

- 1) ディカーは、ディケーのドーリス方言。
- 2) ホメーロスにおいてディケー及びディカイオスは、「習慣」「仕方」を意味する語として、又「裁判」「判決」を意味する語として主に使われていた。ピンダロスにおいても、*Pyth.* 2,85 *Pyth.* 1,50 では「習慣」「仕方」、*Isth.* 8.26, *Pyth.* 4.153では「裁判」「判決」を意味すると考えられるディカー、ディカイオスが見られる。この論文では、このような意味以外のディカー、ディカイオスについて考察してみたい。
- 3) *Ol.* 1,54-62.
- 4) *Pyth.* 3.45-58.
- 5) *Pyth.* 4.90-92.
- 6) *Pyth.* 3.8-44.
- 7) *Isth.* 5.53, fr. 70. F. ハイニマン, 広川洋一・玉井治・矢内光一訳『ノモスとピュシス』みすず書房, 1983, p.77. ロイド=ジョーンズ, 眞方忠道・眞方陽子訳『ゼウスの正義』岩波書店, 1983, p.83.
- 8) *Nem.* 5.1-7.
- 9) この箇所におけるノモスについては、「ゼウスの意志」「運命」「習慣・因習」又オルフィックに由来するものである等の見解がある。これらの様々な見解は、M. Ostwald, Pindar, Nomos and Heracles, *Pindaros und Bakchylides*, Wissenschaftliche Darstellung, 1970, pp.207に詳しい。
- 10) *Pyth.* 2.87-88において、ピンダロスは、真っすぐな舌の人間はあらゆるノモスの下で受け入れられると語っている。言い換えれば、あるノモスだけに受け入れられるものもあるということである。
- 11) *Nem.* 5.14-16.
- 12) *Pyth.* 4.140-155, *Nem.* 3.28-29.
- 13) 正義に叶うことがヒュプリスと対応させられて述べられている箇所は、*Od.* 6.120, 9.175, 13.201, *Erga.* 213, 217. 外国人の権利については、*Od.* 21.312, *Erga.* 225.
- 14) *Erga.* 255-264.
- 15) ヘシオドスの正義については、広川洋一『ヘシオドス研究序説』未来社, 1975参照。
- 16) ペーレウスについては、*Nem.* 3において正義に外れた行為をした者と述べられている。しかし、その後「この物語を語ることには躊躇する」と述べ、この話は打ち切られている。*Pyth.* 3.82-106.においては、彼はカドモス並んで善き人々の代表として歌われている。彼が不幸になったのは正義に外れた為とは考えにくい。
- 17) *Pyth.* 8,92-94, *Ol.* 7,95.
- 18) *Erga.* 226.
- 19) *Agam.* 760-761.
- 20) Archilochus, fr. 13, 122, 131. Theognis, 377-392.
- 21) *Ol.* 2.55-80.
- 22) *Erga.* 155-175.
- 23) ピンダロスの時間については、H. Fränkel. Die Zeitauffassung in der frühgriechischen Literatur, *Wege und Formen frühgriechischen Denkens*, Munich,

- 1955, pp.10-15. D.E. Gerber, What Time Can Do (Pindar, Nemean I.46-7), *TAPA* 93, 1962, pp.30-33, P. Vivante, On Time in Pindar, *Arethusa* 5, 1972, pp.107-131. C. Sigal, Time and The hero, The Myth of Nemean I, *Rh. Museum* 1974, pp.29-39.
- 24) ホメーロス、ヘーシオドスのヌースについては、K. von Firlitz, NOOΣ and NOEIN in the Homeric Poems, *CP*: 38, 1943, pp.79-93, D.J. Furley, The Early History of the Concept of the Soul, *BICS* 3, 1956, S. M. Darcus, Noos Precedes Phren in Greek lyric Poetry, *L'Antiquité Classique* 46, 1977, pp. 41-51, S. M. Darcus, How a Person Relates to νοός Homer, Hesiod, and the greek Lyric poets, *Glotta* 58, 1980, pp.33-44.
- 25) *Il.* 1.353, 8.143, 13.732, 14.160, 14.252, 15.52, 15.242, 15.461, 16.103, 16.688, 17.176, 17.546. *Od.* 3.127, 5.103, 5.137.
- 26) *Il.* 3.63, 16.35, 20.25, 23.484, *Od.* 6.121, 8.576, 9.272, 10.240, 10.329, 13.202, S.M. Darcus, How a Person Relates to νοός in Homer, Hesiod, and the Greek Lyric Poets, pp.37-38.
- 27) *Theogonia*, 37, 51, 537, 613, 1002. *Erga*, 105, 483, 661.
- 28) *Erga*, 260, 685.
- 29) 広川洋一, 前掲書, pp.315-327.
- 30) *Il.* 10.391, 15.129, *Od.* 8.78. Aeschylus, *Pe.* 750.
- 31) 他に *Theognis*, 946, 1008, 1298.
- 32) 他に *Pyth.* 6.51, *Pae.* 5, 45, *Pyth.* 1.40.
- 33) 他に *Ol.* 2.92, *Pyth.* 5.110, *Pyth.* 8.51, *Isth.* 1.40, *Isth.* 5.61.
- 34) *Theognis*, 109, 121, 125, 154, 203, 395, 397, 480, 498, 500, 580, 631.
- 35) *Theognis*, 88, 89, 365, 461, 686, 760, 792.
- 36) *Theognis*, 133-142, 197-208, 377-397.
- 37) *Nem.* 3.40-42.
- 38) *Pyth.* 1.94-96.